北海道を語る。有史以前から〈いま・ここ〉までをひと続きに語る。その当たり前に思えることを、全道を丹念に廻る現地調査と、膨大（ぼうだい）な古文献や殖民記録の研究とを合わせて最初に成し遂げたのは、河野常吉という一人の学者であった。

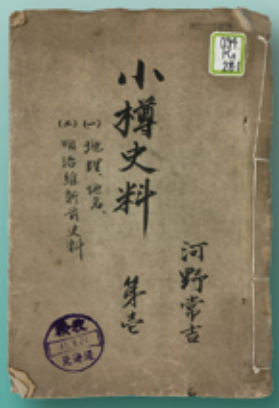
河野常吉は、文久二年（一八六二）長野県東筑摩郡島内村（現松本市）の学者の家に生まれた。長野県師範学校松本支校を卒業し、満十六歳の若さで西筑摩郡福島学校に訓導（正規の教諭）として赴任。その後あらためて慶應義塾で学び、二十二歳で鉱山分析に従事。さらに二十四歳で新聞編集に携わって自由民権の志士とも交流。翌年には長野一等測候所の創設時に所長として就任し、後に中央気象台に勤務した。彼の学問領域は、その時点で政治・経済・統計・歴史・地理・考古学・教育・農業・地質・気象に及んでいた。

常吉の転機は、明治二十七年（一八九四）に訪れた。三十一歳で北海道に渡り、道庁の嘱託となった彼は、新殖民地における状況調査にあたることとなった。そこで彼は、石狩・胆振・渡島・後志を皮切りに、まだ未開の原野と森林が広がる道東・道北にまで足を運び、見聞した詳細な記録をもとに、先ず根室・北見・日高・釧路・十勝の『北海道殖民状況報文』を順次刊行。その仕事に対する熱心な取り組みにより、彼は図らずも、蝦夷地の時代から脈々と続く北海道の歴史と、同時に、彼が目の当たりにしているリアルタイムの状況について、知見が最も幅広い人物となっていった。

常吉の仕事は、『北海道史』を始めとする道内各地の歴史書の執筆に代表される。彼はその準備のために、収集された古文献の分析や、古老からの聞き書き、開拓地に関する統計記録、さらには庶民の風俗文化に至るまで、膨大な草稿を残した。また、考古学と民族学の方面においても活躍し、遺跡の発掘調査や民具の収集などにあたった。調査・研究のため千島・樺太にも赴いている。晩年には小樽図書館の館長を務め、小樽市史の土台となる多くの資料を書き上げるなど、小樽にもゆかりが深い。しかし、自分の信念を曲げず、ひたむきに事にあたるその性質は、しばしば勤め先との軋轢を生み、そのため彼の業績は、存命中も、そして没後も、充分に評価されてきたとは言いがたい。

今回の展覧会では、北海道史研究のパイオニア・河野常吉の足跡を、著書・草稿・写真等の展示を通じてご紹介したい。

忍路の環状石籬　大正 11 年（1922）8 月撮影　裏面に河野常吉直筆解説



河野常吉『小樽史料　第一』

石狩国上川郡アイベツ原野区画図
明治 28 年（1895）　河野常吉着彩

◎主な展示資料

北海道史　初版
北海道立図書館　河野常吉資料
　小樽史料、小樽発達史、後志国状況報文 等
北海道博物館　河野常吉旧蔵写真
　小樽有幌車道、小樽港町の景、銭函小樽間道路建築、
　後志殖民状況、樺太・占守島・色丹島の状況 等
河野家旧蔵　河野文庫資料
　弁慶号試運転写真、日露境界画定会議記念写真 等
（河野常吉自筆解説入り）
石狩国川上郡殖民区画図　三種（河野常吉による着彩）
長野時代資料　明治二十二・二十三年長野気象表 等

市立小樽文学館
〒047-0031
小樽市色内1-9-5
（日本銀行旧小樽支店
金融資料館向かい）
TEL&FAX
（0134）32-2388